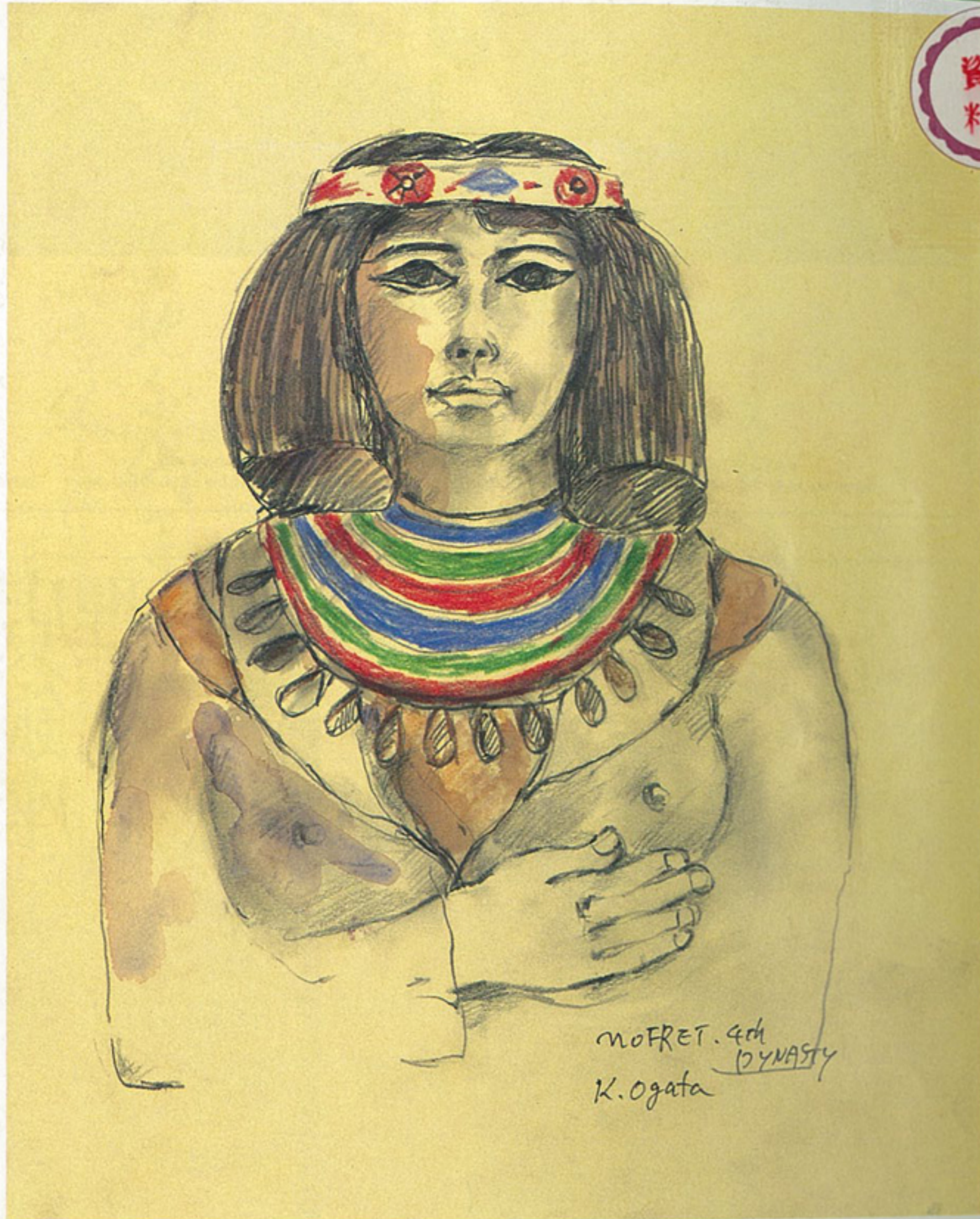


緑丘

0/2
29
887

資料
料革



NOFRET. 4th
DYNASTY
K. Ogata

社団法人 緑丘会

緑丘 (第五八号)

昭和五十九年十二月二十五日

緑丘会東京事務所

東京都豊島区東池袋三十一番一丁目サンシャイン60(57階)
電話 〇三(九八一)二二三四〇

社団法人 緑丘会



人と環境のエンジニアリングをめざして

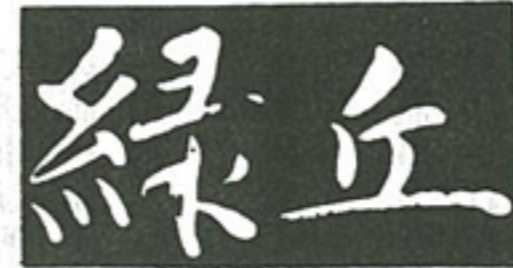


世紀東急工業株式会社

取締役会長 八木勇平 (昭和8年卒業)

取締役社長 工藤忠夫

〒105 東京都港区芝公園2-9-3 03(434)3251(代表)



・目次・

第45回通常総会報告..... 2

●海外特集●

ダニエルズ／ストーリー先生御夫妻の思い出.....
ヒュー・コータツツイ卿... 8

ダニエルズ先生をしのんで.....寺尾 八郎...17

環太平洋時代に備えて、いま人材養成が必要だ.....
.....リチャード・N・マッキンノン vs 八木 勇平...19

海外での緑丘会.....大庭 定男...25

シドニー発の近況報告.....岡村 宏平...27

留学生生活を終えて.....今 喜典...30

アメリカ雑感.....太田 晴之...34

テラー・キー賞と勲二等の栄誉をうけた西野嘉一郎先輩
.....金垣 英雄...36

緑丘二人展

ご挨拶.....藤井 栄一...39

長谷川正治君の書額寄贈への祝辞.....渡辺 文郎...40

小樽商大校歌（書額）を贈る.....長谷川正治...41

木曾栄作先生御逝去.....北村 正司...43

木曾栄作先生を偲んで...竹村 保昭...45 木曾栄作先生を悼みて...林 栄三...47

父を偲んで.....板垣 アヤ...49 物故会員...53

野口誠一郎君急逝.....酒井 勇...51

随想・手記・短歌・俳句

ひとつの自分史.....山口 文雄...54

放送史にみる緑丘人.....河本 達徳...57

『大野純一先生追想筆』の刊行を終えて.....飯川 益男...60

句苑緑丘.....63 短歌.....70

緑丘住来.....64 学園だより.....沼田 久...73

支部だより.....76 同期会だより.....82

会館利用日誌.....107 会員異動通知.....110

緑の紙風船.....122 編集後記.....131

表紙画 尾形 圭介(二紀会・昭34)

日東冷蔵株式会社

代表取締役 青木 慎 吾

(昭和22年卒)

〒120 東京都足立区千住河原町49番1号

電話 (代表) <03>881-6151

(直通) <03>881-6105

ご婚礼・ご宴会・お写真

祝賀会・同窓会・展示会

出張宴会・ご法事

半蔵門

東條會館

千代田区麴町1-4 ☎265-5111

地下鉄・半蔵門駅2分・麴町駅5分

必ず滅亡すると、叫んでいる、ドイツの哲学者ロマーノ・ガルディニやアメリカの哲学者ノースロップ等が言うところの印度哲学が内胞する東洋の絶対無の世界、黒白一体の一元の世界に、空の禅哲、や、書が位置していて、この東洋の哲理が、ギリシャ哲学に據る神学体系と合流する接点に核癡絶の理論が成り立つ、と言う諸論を骨子として、私は書を通じて核の癡絶を世に訴えているのです。私の作品集の「叫び」はかかる意味合いから私の書作態度を示したものと受け取っていただければ幸いです。最後に藤井新学長のもとに母校の益々の発展を祈念し、緑丘の栄光を讃えて欄筆します。

私は昭和五十年十一月十二日(六一歳)脳血栓に倒れ、右半身が不随となり、以来私は右手が使えなくなり、それからの作品はすべて左手で書いて居ります。その時の私の心の支えとなったのは中国の書家、高鳳翰(清朝)が右手を病んで左手で字を書くようになり、それからの

作品が良くなったと言う事であります。私は今日迄右手で書いても左手で書いても良いものは良い、悪いものは悪いと言って、頑迷に左手遅牛と名乗ることを拒んで参りましたが、この作品集に限り訳文の下に右手は(右手)と書いてありますので大方のご批判を仰ぎ、且つ私と同じ病にある人の励ましともなればと希望のものであります。

(この項長谷川遅牛作品集あとがきより)

長谷川遅牛氏書歴その他

- 大正二年 室蘭市に生まれる
- 昭和五年 室蘭商業学校卒
- 昭和七年 小樽春畦会入会山田雪畦塾に通う
- 昭和九年 小樽高等商業学校(現小樽商大)卒
- 昭和二十四年 随鷗社(金子鷗亭主宰)入会
- 昭和二十七年 日本書道美術院賞授賞
- 昭和二十九年 日本書道美術院審査員
- 昭和三十五年 毎日書道展大賞授賞
- 昭和三十七年 毎日書道展審査員

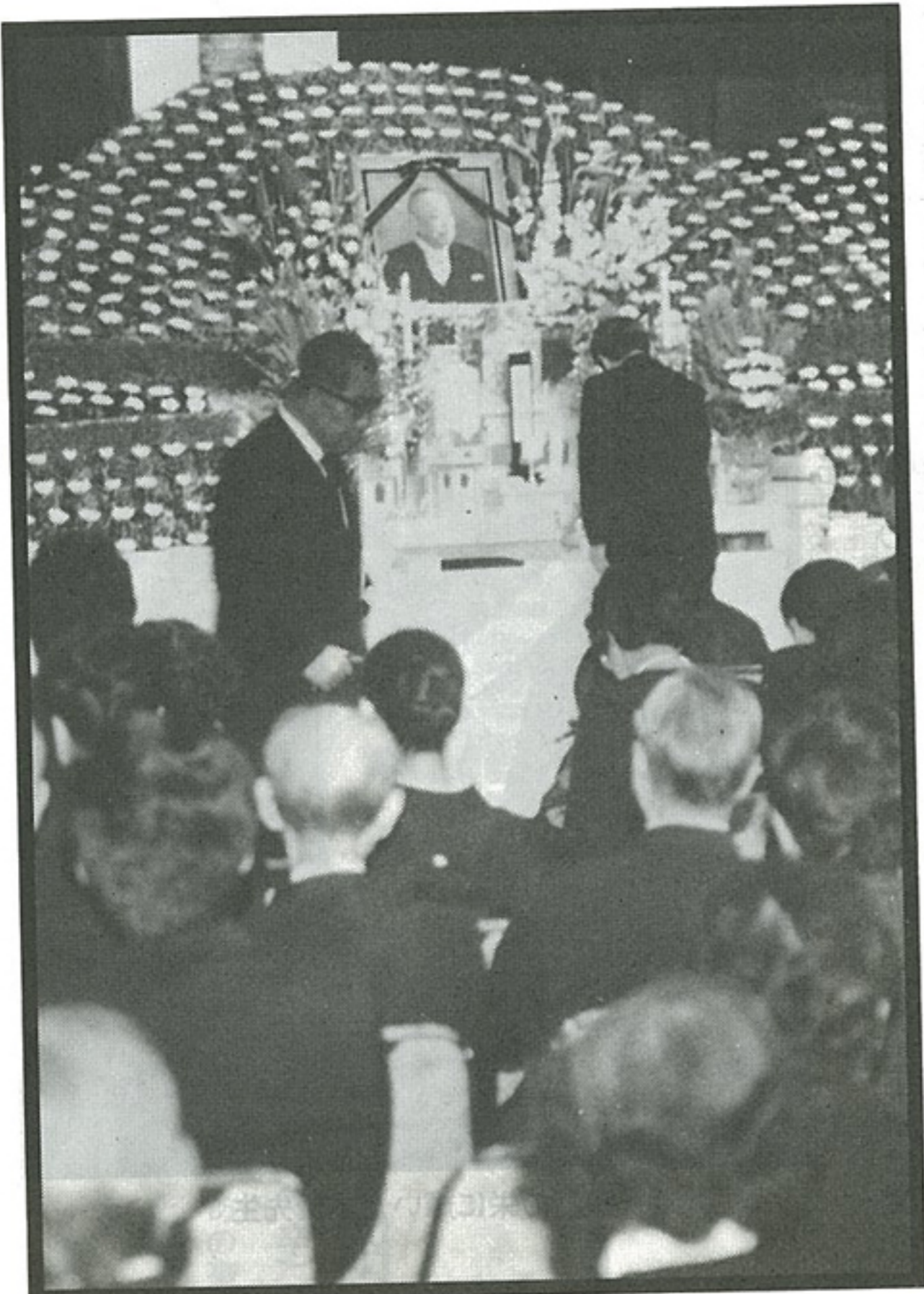
- 昭和三十八年、昭和四十四年 日展連続七回入選
- 昭和四十五年 第一回日本書道代表団員として渡欧
- 昭和五十九年 現代の名筆に推薦される
- 現在 創玄書道会参事審査員
- 北海道書道展会員
- 毎日書道展審査員
- テレビ書道大学講師

現住所 〒061 室蘭市清水町二一六一二
電話(〇一四三) 二二一四八七六

- 佐藤満氏書歴その他
- 昭和二十一年 鈴木翠軒に入門
- 昭和二十四年 小樽経専(現小樽商大)卒
- 現在 日展会友
- 北海道書道展会員
- 桑林会主宰
- 北心展代表

現住所 〒063 札幌市西区琴似一条二丁目
ライオンズマンション七〇二号
電話(〇一一) 六一一八二八七

木曾栄作先生御逝去



▲北海道新聞社提供

小樽女子短期大学学長 北村正司 (昭和6年卒)

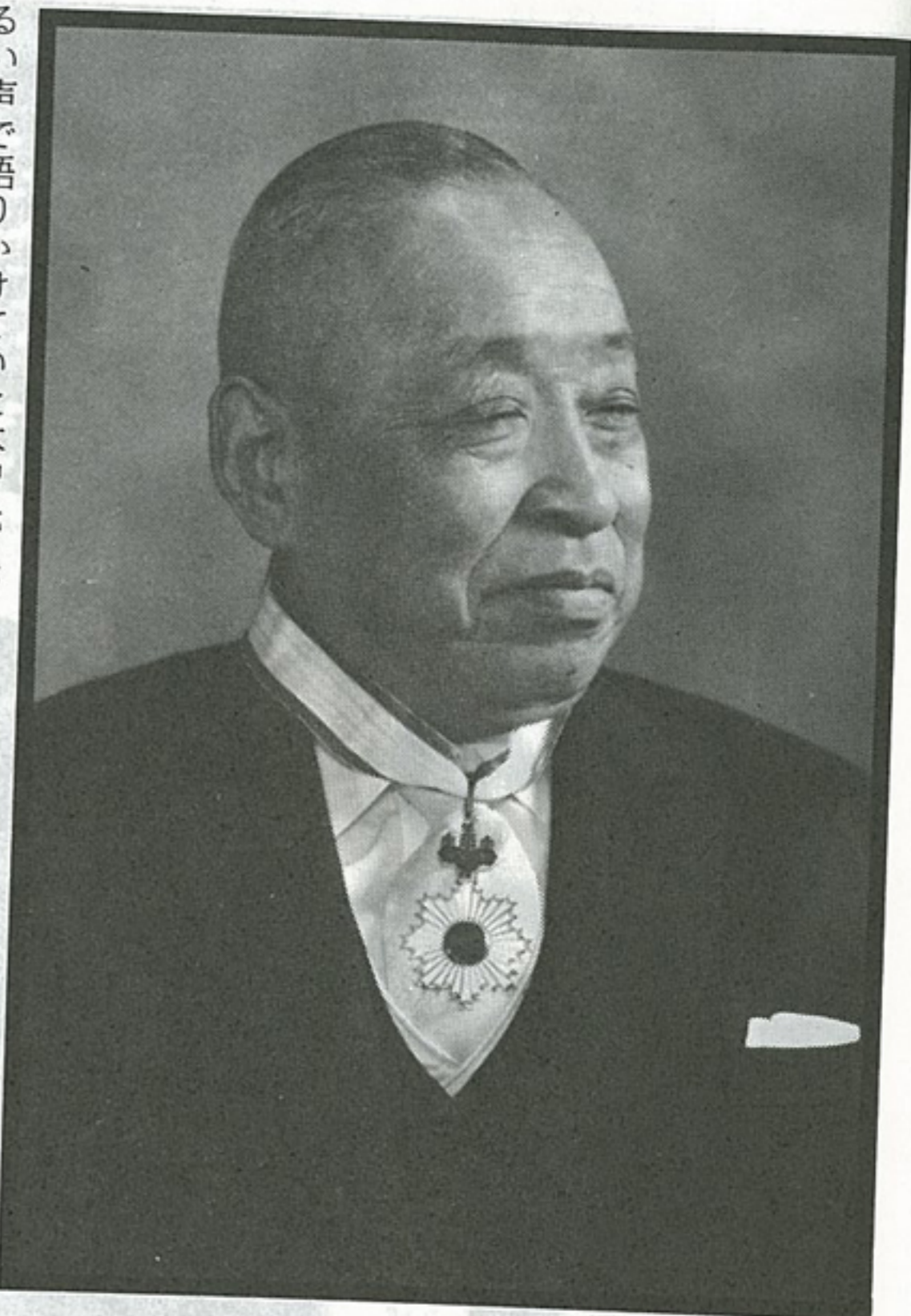
木曾栄作先生は八月三十一日食道静脈瘤破裂にて入院(協会病院)十月十八日午前十時三十八分肝不全にて眠るがごとく大往生をとげられました。なお葬儀は次の日程で営まれました。

- 十月十九日 密葬通夜(松ヶ江会館)
- 十月二十日 密葬告別式(同上)
- 十月二十二日 本葬(小樽国際ホテル)

いずれも故先生にふさわしい立派なお式でございました。

弔 辞

木曾栄作先生
大きな頭に大きな目。いつも親しみ深く見つめていた木曾先生。
太目の体に分厚い唇。いつも大きな明



叙勲の栄に輝いた木曾先生

るい声で語りかけていた木曾先生。

頭の回転の速さは驚くばかり。ひとつのことを話している一方で、他の事柄が頭の中を駆けめぐっていた木曾先生。

広い識見と先見性に富み、決断と実行、細心の注意力をもった木曾先生。

学生からは、木曾とコレポンと合わせた「木曾ポン」の愛称で親しまれた木曾

先生。

卒業生からは、「木曾先生が出席するなら」と慕われた木曾先生。

市井シヤイの人に気軽に話しかけ、酒を交わすこともあった木曾先生。

先生のご入院の報に接しました時、先生の精力あふれる行動力と逞しい生命力で、きつと回復して、またあの温かいお

人柄に接することができると期待していましたが、誠に残念でなりません。私どもは悲しい気持ちでいっぱいです。胸のはりさける想いです。

「おいしい人を失なった」

「緑丘の大きな星を失なってしまった」この気持ちは、緑丘人のみならず、ここにご参列の皆々様、いな、先生を知るすべての人のお気持ちと存じます。

思い起せば、先生は昭和六年に母校小樽高商の教壇に立ち、昭和四十二年に小樽女子短期大学学長として移られるまでの三十六年間、幾多の俊英を育て、社会に送り出されました。そして、その教え子達が、今や日本の経済界の各層において、大いに活躍していることは衆知の事実であります。

木曾先生は、苫米地英俊先生の後を継ぎ、日本の商業英語界の泰斗として、全国的にその名を高め、緑丘の英語教育を磐石のものといえました。

一方、長年にわたり北海道英語教育研究会の会長として、道内の中学校・高等

学校の英語教育の向上に多大な貢献をしてきたことも皆様よくご存知のところでもあります。

木曾先生、旧校舎の奥まったところにあった緑丘会事務局を想い起してください。

その部屋で、よく学生と気軽に談笑し、それを通して学生を陰に陽によく指導しておられました。また同時に、同窓生とのパイプ役をよく果たしておられました。今日緑丘同窓生が強固なつながりを維持している背後には、木曾先生の絶大な力

があつたと感謝している次第です。先生の偉大な業績は、今後とも私も緑丘人の指針として心の中に残ることでありましょう。

終りにのぞみ、先生がこよなく愛した「小・樽・商・大」の4つの漢字を文頭につけて、次の文章をおくらせて頂きます。

小高き丘のわが学園

樽都を眼下に睥睨（ハイゲイ）し

商業英語の金字塔

大いなるかな木曾先生

木曾栄作先生を偲んで

竹村保昭

(昭和24年卒)

木曾栄作先生
「この世に別れは、つきまとうもの」
とうとう先生と、永久のお別れの日がきてしまいました。

幽明、境を異にし、もう先生のあの豪放磊落な懐しい御姿にも接することができなくなりました。
悔みてもあまりあることです。

すでに幽明境を隔てる先生のご冥福を心よりお祈りし、ありし日の先生を偲びつつお別れ申し上げます。

木曾栄作先生、さようなら。

昭和59年10月22日

社団法人緑丘会

理事長 八木勇平

(昭和8年卒)

この九月半ば、私ども昭和二十四年卒業、第三十五周年記念全国大会を熱海富士屋ホテルにて開催するにあたり、幹事の一人として、先生のご出席を懇望し、先生も快く、ご承諾、「部屋は松尾さんと一緒にしてね」などといわれて、私どもも楽しみにしていたのですが、その十日程前でしょうか、突然、吐血、肝不全にてご欠席との奥様よりの報に接し、驚き入った次第でした。

その後、数回にわたる輸血、奥様、ご長男、ご次男はじめ、御親族のみなさまの手厚い看護にもかかわらず、御他界なされましたこと、かえすがえすも残念といわざるをえません。

先生には、生前、ほんとうにお世話になりました。

私とは深い御縁がございました。

在学時代は、ゼミナールとして、先生の商業英語をとらせていただきました。

アメリカ留学中のお話やら、国際性豊かなご講義は、戦後アメリカ流民主主義



小樽商科大学教授時代の木曾先生

の台頭の時代とマッチし、感銘深く拝聴したものです。

就職も先生にお世話になり、小樽の海運局の一室で、進藤眞一先輩（おかげで進藤さんには仲人もしていただきました）と、面接し、シェル石油に入社することができました。

時折、オフィスに姿をお見せになり、私を暖かく、叱咤激励してくださいました。

その後、サラリーマン生活に別れを告げ、現在の代々木ゼミナールの経営に参加し、昭和五十六年、私どもが札幌分校を設立するに及び、地元の先生の斡旋に随分お骨折をお願いいたしました。

小樽、札幌、東京と会食をともにしては、種々、お力添えを願ったものでした。

当時は、小樽女子短大の学長をされていたのですが、それも北村正司先輩に譲られ、その後は、私どもの顧問として、はたまた講師として、高齢にもかかわらず、ご活躍になりました。

受験生を相手に、ほんとうに真剣に、

まことの英語の勉学のあり方を教授されたのでした。

外人とのペアの英作文の講義は、先生の最も得意とされる場所でありました。

札幌寮の貴賓室を先生に御提供申し上げましたところ、「君、ゆつくり休んで、勉強ができるよ」とご機嫌でした。

寮生とも、言葉を交わされ、若者との交流をエンジョイされておりました。

そしてまた、私どもがお手伝いして、北海道の滝川に、昭和五十七年四月、学院女子短大を設置するにあたって、英語科の教授陣の人選に、種々労をお取りくださいました。

受験参考書も、私どもの子会社である「代々木ライブラリー」から、何冊も出版されました。

次から次へと、自筆の原稿で、きわめて意欲的に御執筆になりました。

先生は時流に敏感で、

「竹村君、これからの英語は、やっぱり、長文読解、要旨問題だね。今度はこの新傾向のやつをだすよ」と、はりきってお

いででした。

しかしこれが最後の言葉となってしまいました。

先生は、ほんとうに、すべてに積極的

に、しかも社交術に富んでおられました。

代ゼミの入学式、父兄会、講師室、先生のいらっしやる場所には、いつも明

るい楽しい雰囲気醸しだされていま

た。

そして、代々木ゼミナールの発展をいつも心から祝福してくださいました。

先生のあのユニークな、かん高いしゃし人懐こいお声が、まだ私の耳朶に残っています。

木曾栄作先生を悼みて

林 栄三
(昭和28年卒)

木曾先生は、八月末に食道静脈りゅう破裂で小樽協会病院に入院されましたが、相変らずの大きな声が廊下にまでもれておりましたので、まだまだ大丈夫と思っ

ていました。しかし、十月十七日、再度破裂、翌十八日、ご家族の手厚いご看護の中で遂に帰らぬ人となってしまいました。先生が、北海道だけでなく、日本の英語教育界に果たされました数々のご貢

献に思いを馳せる時、もつともご指導、ご活躍をいただかなければならないことが山積みしているのにと、ただただ先生の死が悔まれてなりません。

思い起こしますと、昭和六年に母校の教壇に立たれてから三十六年間、あの分厚い唇からほとばしり出る言葉（英語であれ、日本語であれ）で、時には学生を緊張させ、時には学生を魅了してまいり

「竹村君、頑張れよ」と。

先生、いろいろありがとうございました。どうか、この上は安らかにお眠りください。

先生のおっしゃるとおり、私もまた頑張りつづけます。

(代々木ゼミナール札幌校理事長)

ました。先生は大学でのご研究の他に、社会教育にも大変熱心にご活躍されておりました。先生が残された数多くの輝かしい足跡のうち、ご研究の集積として、とりわけ昭和二十八年に刊行されました『商業英語活用辞典』（三省堂）を、また社会教育活動のひとつとして「北海道英語教育研究会」の結成をあげなくてはなりません。

苦米地英俊先生が日本の商業英語の基盤を確立された後をうけて、更にその基盤を補強されたのが木曾先生の『商業英語活用辞典』であります。この辞典は、先生が最も脂の乗りきった頃の労作で、学会のみならず、実業界でも高く評価さ

れたことは、緑丘人の喜びであり、また誇りでもありました。

先生は努めて物事を巨視的にとらえ、またロマンチストとしての夢を追求される方でありました。先生は、戦後間もなく、「北海道英語教育協会」（後に「北海道英語教育研究会」と改称）を結成して、北海道の中学校、高等学校の英語教育の向上に献身的に努力されました。特に英語教育界では、当時、世界的にまたは日本的に著名なフリーズ博士、ホーンビー教授、岩崎民平教授、小川芳男教授等多数の学者を北海道にお招きし、北海道の英語教育界に大いに刺激を与えたことは、今でもしばしば現場の先生方から耳にするところでもあります。

先生は、かねてより「実用」英語を強調し、その指導に率先されておりました。先生は雑談の中で、よく「私の名は『基礎英作』だよ」と言って、笑っておられました。これを具体化したのが『基礎英作文』という小冊子で、これは当時の高等学校では大変重宝がられたものです。



昨年夏お元気だった頃の木曾先生

昭和四十二年に、新設の小樽女子短期大学の初代学長に就任されました。開学早々で、まだ基盤の脆弱な私学であるため、先生は自ら東奔西走の努力を重ね、ようやく今日の安定を見るようになりました。これはひとえに先生の精力的なご尽力とお人柄のなせる業であり、また先生がつねづね口にされておりました緑丘同窓生のお力ぞえのお蔭でもあります。

先生は、学究肌であると同時に、社交家でもありました。教え子の会合に出席するのが何よりも好きであり、また大切にしておられました。それは、人との出会いを広げ、交わりを深め、お互いに摂取することによって、つねづね自分自身を若返らせることに努めようとしていた

ものと思われれます。これが同窓生との絆を一層強めてきた所以でもあると思います。更によく知人や教え子をつれて暖簾をくぐりましたが、酒はあまり口にすることなく、もっぱら雰囲気を楽しみながら、英語学やら英語教育などについて自由にご意見を述べておられました。

先生はまた極めて筆まめで、あの特徴ある書体で直ちに礼状を出すことに心掛けておられたようです。どんなにつまらないことでも嫌な顔一つされしないで、親身になって聞いてくださる。そして、そのことを機縁にいつまでも心にかけてくださる。こういった先生との出会いを重ねる中で、人としての生き方にかかわる数え切れない教えを受けた人が数多くおられることと思います。

書き進める程に、長年にわたり先生にご交誼・ご指導をいただいた往時が走馬燈のように脳裡を駆けめぐり、われ知らず目頭の熱くなるをおぼえます。

木曾先生、どうぞ安らかに眠りください。

父を偲んで



板垣アヤ (在米二十年)

その後、アメリカへ帰ってから「あれだけまだ元気でよく喋れるから大丈夫だ」と云う。その言葉を「そうね」と何んとも信じておりました。

その後何度かの兄弟とのやりとりで父の病状を知った私はとるものも取り敢えず急いで帰樽し、その三日後に父がこの世から姿を消すとは思っても居ませんでした。あれだけ多くの小樽の方達、遠くは札幌の方達の血液によって支えられ病院の御医者様、看護婦さん達の献身的な支えで生きている状態で、最後まで生き抜いた父、死の前々日には私共兄弟姉妹四人の前で弟の冗談に大きく口を聞いて笑った父、その日の朝はヒゲを丁寧に剃って貰い、薄くなった髪に三種類ものローシヨ

ンを順序よくつけたオシャレな父でした。

私の育った頃の家庭は普通一般の秩序正しい家庭とは違い、朝夕親子揃って食事を共にするとか談らんをするとかはなかった様な気がします。父は割合自分のスケジュールに合わせて食事をし、睡眠をとっていた様です。でも自分の書斎の掃除はよく烏打帽をかぶってやっていたし、又気分のよいときは、浅い大きなお鍋にミルクコーヒーをたっぷり作ってくれ、この習慣は、お鍋がパーコレーターにかわり、そしてドリップ式のコーヒーになるまで続けてくれました。ほんの断片的な父との想い出があれこれと浮びますが、基本的には子供も一個の人格として扱ってくれ、自分は親だとか、子供のくせに、或いは女だからと云う様なことはなかったのではないのでしょうか。父親と云うものは、子供が年をとってからより一層必要になるものだと私の主人はよく云って居りますが、本当に私にとって近年の父はあれこれとよく教えてく

私はいつも東京へ着くとすぐ小樽の家へ電話をかける。すると必ず「やあ、アツチャン着いたかい」という父の声が返ってきます。しかし、もうあの父の声を永遠に聞くことは出来ません。私は足取りも重く、小樽へ向わなければなりません。今年の八月末日、札幌の学会に出席中の主人は、入院中の父を見舞っ

れることがありました。その一つに人に教える立場にある私に、「教師と云うものは線路の上に乗せた汽車を終点まで押して行つては駄目だよ、線路からはずれない様に自分の力で終着駅にたどりつく様にしなければならぬ」と云ってくれました。私はこれから少しずつこんな話が出来ることをとて楽しんで居りましたのに。

私の持参のローズ色の大きなタオルを「Oh Wonderful!」と喜んでくれた父、少くとも最後の三日間を共に父と過ごすことが出来たことは、私にとって「Oh Wonderful!」なことでした。そして父は終生小樽を愛し、人々を愛し沢山の人達によって支えられて「Oh Wonderful!」な一生を送らせて頂けたと思います。すべての儀式の終わったあと、紅葉たけなわの高商の山を背にして雨上りの小樽の港にさしかかったカラフルな虹の門をくぐつて、父は新しい道へ出発したのではないかと思つています。

(木曾栄作先生御長女)



水天宮から港を眺む



野口誠一郎君は去る六月、昭九会道東旅行から帰った直後発病、十日に亡くなった。急逝から葬儀に至る模様は大体次の通りである。

六月八日、昭九会旅行は札幌で解散し、野口君は清水、宮崎両君と一緒に帰郷、午後八時ごろ自宅で突然発作を起こし、急ぎ入院、剝離性大動脈瘤と診断され、十日午前十一時五十分逝去された。七十四歳。遺族は美津枝夫人、長男(喪主)礼二さん、長女和子さん、次女淡輪敬子さん。

野口誠一郎君急逝



酒井 勇

(昭和9年卒)

なお野口君の役職は北の誉酒造(株)

取締役相談役、(株)丸野口商店取締役会長をはじめ(株)秀映社代表取締役、北海観光(株)、北海木材(株)、北海容器工業(株)、大同倉庫(株)、(株)北海道養老の滝、(株)ホマレ商会の各取締役、(株)中島電気相談役、北海道陸上競技協会顧問、小樽陸上競技協会会長(財)小樽潮陵会理事長など。

〔密葬〕十二日午前十一時までに汐見台の自宅和光荘で近親者のみで行われ、そのあと一般焼香のさい昭九会員九人は友

人として焼香に参列した。

なお、和光荘は「和光同塵」に由来すると聞いているが、仏間は邸内のほぼ中央に位置し四一五〇畳敷き、客間は小樽市重要建築物に指定されている。

野口家は浄土真宗東本願寺派。家憲は仏の心即施す心、還元主義で貫いており、月々講中の集りで商売も繁昌している。古めかしい野口商店名も変えませんが、とは故人の弁。故人の人となりもここに発している。

〔本葬〕六月二十八日午後一時から三時